



出国。ところが19世紀半ば、蚕が病気で全滅しかかったのです。良質の生糸を求めてたどり着いたのが日本。横浜にいる外国人の5人に1人はフランス人といわれるまでになります。一方でフランスが日本にもたらしたのが光、つまり「近代化」です。私は1985年、パリの外務省外交史料館で14代將軍の徳川家茂がナポレオン3世に送った親書を発見しました。家茂はフランスの絹産業復興のた

日本とフランスが日仏修好通商条約を締結、友好関係が始まって今年で160年。両国企業を顧客に抱える経営コンサルタントで、幕末・明治の日仏交流史研究家の顔を持つクリスチャン・ポラックさん(67)は、「絹」と「光」が2国の縁を結んだと話す。条約が結ばれて横浜港が開港すると、フランスからは絹商人が続々来日しました。当時のフランスは世界有数の絹織物の輸

日仏交流史研究家
クリスチャン・ポラックさん

「絹と光」の縁たどる ①



親密な関係、幕末から 歴史ひもとき橋渡しし

め、蚕の卵を付着させた蚕卵紙1万5千箱を送ることを決めます。ナポレオン3世が日本に派遣したロッシュ公使はその見返りに製鉄所や造船所の建造と最新技術・機材の提供を約束しました。産業につづいて文化の交流も進みます。日本の浮世絵や工芸に触れたフランスではジャポニスムと呼ばれる日本趣味が流行します。日本とフランスは経済と文化の交流によって固い

関係を築いてきたのです。71年、学生時代に来日し、日本暮らしは47年。ビジネスと二足のわらじで研究を続け、貴重な資料も発見した。長い友好関係があるにもかかわらず、その歴史は両国でもあまり知られていない。私は4年前、明治時代に横須賀製鉄所(造船所)の会計係・写真師だったエミール・ド・モンゴルフィエの子孫を探し当て、フランスに会いに行きました。そこで創設

まもない製鉄所の写真などを大量に見つけました。さらに同家がアントワーヌ・ベシユトワルという人物と遠戚関係にあることも知られます。横浜の実業家・原三溪と代理店契約を結んでいたリヨンの生糸輸入商です。すぐに子孫を訪ねると、彼が日本から持ち帰った絵画や陶磁器などを見せてくれました。どちらの子孫も自分の先祖が日本で何をしていたのかを知ると、大変な興味を示しました。昨年、ベシユトワルの子孫20人が初めて日本を訪れ、原三溪のご遺族と面会を果たしました。横須賀美術館ではモンゴルフィエの写真を展示することもできました。こうして新しい日仏交流の橋渡しができることを、とても幸せに思います。

史料や美術品など膨大な収集品を惜しみなく貸し出し、展覧会や講演を開く。

幕末・明治の日本で懸命に生きてフランス人たちの存在をもっと知ってほしいからです。戊辰戦争で官軍と戦った兵士や、3歳から64歳で亡くなるまで日本で暮らした浮世絵師もいるんですよ。どうです、日仏交流史に興味がわいてきませんか？

(編集委員 窪田直子が担当します)